

国 語

以下で引用している問題は、すべて2022年度前期入試の問題です。

著作権の関係で国語の入試問題原本は掲載できませんので、可能ならば書店や塾で入手してください。

来校いただければ、本校の『入学試験問題集（2020年度～2022年度）』を差し上げます。

例年の入試説明会で、国語科からお話しているのは以下のことです。

- 読解と表現との二本柱を立て、長文をじっくり読み通すこと、自らの考えを記述して答えることを重視しています。
- 小説の主人公の人物像や行動を読み取ることは、読者である私たちの生き方や経験にかかわっています。日頃から小説など数多くの文章を読む中で、人の心の動きや考え方について学ぶようにしてください。
- 漢字の書き取り問題： 残念ながら、字体が乱れ、読めない漢字を書く人がいます。とめ・はね・はらい・文字の形をきちんと意識して、ていねいに書く練習を怠らないでください。いかげんな文字には点数を与えません。
- 選択肢問題： 内容読解の問題では、傍線部周辺の数行程度しか見ないで答えている人が多いようです。全文をしっかり読み通すことが、どの問題を解く上でも基本になります。
- 記述問題： 読むことに十分な時間をかけて、ていねいに考えて書いてください。とくに解答欄が大きい問題は、読み取って考えたことを、自分の言葉で存分に書いてほしいと思います。傍線部の前後の引用だけですませたり、自分勝手な思い込みでストーリーを作ったりしてはいけません。記述問題の配点は、全体の半分以上を超えることもあります。自分の言葉で書いて表すことをよく練習してください。それには、文章を自分の頭と心でしっかり読み通すことが絶対必要なのです。

では具体的に、2022年度の前期入試問題で上記の注意点を説明したいと思います。

2022年度の前期入試では、有島武郎（ありしまたけお）の『一房の葡萄（ひとふさのぶどう）』という小説を出題しました。1920年に発表された、かなり古い作品です。国語科としては、現在活躍する作家の作品だけではなく、文学史に残る作家の作品もぜひ読んでもらいたいと考えております。古今を問わない幅広い読書経験を積むことで、優れた文章に多く触れ、豊かな感性を育んでもらいたいという国語科からのメッセージです。

設問については、これまでどおり、本文の内容を正しく読み取る力を問うものとなっております。本文をおおざっぱに読み流して感覚的に問題を解こうとしても、望ましい結果は決して得られません。一つ一つの表現にこだわって、その表現をわかりやすく言い換えるとどのようになるのか、また、その表現が小説の中でどのような意味を持つのかといったことを意識しながら、丁寧に本文を読み込んだ上で設問に挑むようにしてください。

ここでは、問十一を例に挙げて、説明したいと思います。

『一房の葡萄』本文の中程で、ジムの絵の具をとってしまった“僕”はジムたちに詰め寄られて“先生”の部屋に連れていかれます。そして先生に「あなたは自分のしたことをいやなことだと思ったと思っていますか」と尋ねられた直後の本文85行目「眼から涙がむやみに流れてくるのです」に付された傍線部⑩に関する設問で、問十一は、“僕”の心情を読み取る問題です。

問十一の問題文には「『眼からは涙がむやみに流れてくるのです』とありますが、このときの『僕』の気持ちを説明しなさい」とあります。しかしここで単純に「悲しいから」と答えるのでは不十分です。傍線部⑩までの部分から、まず“僕”が泣いている状況・心情を読み取ることが必要です。

ではまず傍線部⑩より前に“僕”が泣いている場面を振り返ってみましょう。ジムの絵の具がなくなったことで級友たちに囲まれ詰問されたときに、本文66行目傍線部⑧「しくしくと泣き出してしまいました。」とあります。ここでは、友人たちは「泣いておどかしたって駄目だよ」と馬鹿にするような発言をしますが、「僕だけは本当に心からしおれて」しまい、「取り返しのつかないことになってしまった」と、「淋しく悲しくなってきた」、「しくしくと泣き出し」ています。ここでは周囲の級友には理解されませんが、すでに“僕”にとっては心が折れるほどの悲しみであったことがわかります。

さらに受け持ちの先生の部屋に連れてこられ、先生に「それは本当ですか」と尋ねられたときに、「僕は答える代わりに本当に泣き出してしまいました」とあります。

ここは直前の表現から先生に盗人だと思われ信用を失ってしまうかもしれないつらさを実感し、泣いているということがわかります。

しかし、実際の先生の反応はおそれていたとおりではなく、傍線部⑩直前で、先生が非難ではなく、静かに先述の言葉をかけています。そのことで「眼からは涙がむやみに流れて」きたのです。「むやみに」というのは程度が甚だしい様子です。自分がやってしまったことへのショックや、先生に知られることが辛いという不安や心配の状態を経て、先生の、自分の苦しみまでも理解してくれていると感じられるあたたかい包容力に触れたことで、ここで本当に深く自分の罪の重さを理解し、悔いている状態であるといえます。

ここまでのことをまとめ、泣き方をたどると段階的に“僕”は

- ・すでに取り返しのつかないことをしたことに十分気づいている。
- ・先生に知られてしまうことをおそれている
- ・先生のやさしい声かけで、本当に罪の意識にとらわれている

という状況であることがわかります。そのことをふまえて、今どのような気持ちで泣いているのかを述べてほしい設問でした。

まとめますと、ここでの心情についての問題を解くにあたっては、以下の3点を考えることが必要です。

1. どのようなきっかけがあったのか？
2. その結果として何を理解したのか？
3. どのような心情になったのか？

実際の受験者の解答では、すぐ後ろにある「先生に抱かれたまま死んでしまいたい気持ち」という表現からか絶望していると理解し、「先生に嫌われるのが嫌だったから」や「先生が静かにおっしゃったため、これから怒られるのだと思い悲しくなっている。」のように、先生に嫌われることをおそれての涙とまでしか考えられていない解答も多く、ここまでの状況や、主人公の心情・理解が深まっていったゆえの「泣き」の違いにまで深く考えられていない解答が多く見られました。

一つ一つの表現に気を配りながら、丁寧に本文全体を読み込むことをこころがけてください。

また、解答の形式にも注意してください。

気持ちを問う設問であるにもかかわらず、「〇〇という気持ち。」と答えられていない答案も一定数見られました。実際に問題を解く練習をするときには、「何が問われ」「どのように答えなければならないか」を常に意識しながら取り組むようにしてください。

最後に。

今の自分にはない考え方や価値観に出会えるのが、小説を読む醍醐味です。そうした「読書経験の差」は、試験の場で目にする作品に対応する力として現れてきます。ぜひ多くの作品に触れて下さい。